

総説

ASD 児の余暇活動の特徴と 児童発達支援センターなどでの作業療法の方途

辛島千恵子

| びわこリハビリテーション専門職大学 リハビリテーション学部 作業療法学科

【要旨】

ASD 児の地域生活支援の要として児童発達支援センターなどの役割が期待されているなか、作業療法士の支援の展開が問われている。目的：ASD 児の余暇活動の特徴についてシステマティックレビューをおこない、彼らの自由裁量の時間に展開されている作業・活動を理解し児童発達支援センターなどで展開される作業療法の方途を見出す。方法：Leisure, ASD をキーワードとして PubMed にて検索。システマティックレビューのプロセスに従って適切な文献を選定した。結果：適切な文献は 2 文献で、参考文献が 8 文献であった。ASD 児の最も楽しんで参加していたのは Recreational Activities であった。また、Social Activities への参加は定型発達児に比べて低いが楽しめていた。方途：作業療法士は、ASD 児が選択した好きな余暇活動に参加することを応援し、フォーマルな場である保育園や学校の生活の一部をインフォーマルな状況へと設定したうえで Recreational Activities や彼らが好きな余暇活動の要素を取り入れる支援が重要である。そして、ASD 児の「できる」から自己有能感を高めるような正の循環を促す支援を教育者ともに実践することが求められている。

はじめに

2004 年に発達障害者支援法が施行され、2007 年には特別支援教育がスタートした。同時に市町村による子育て支援へのニーズの高まりと共に、発達障害が疑われる子どもの療育や地域の連携を担う児童発達支援センター（以下児発）などの役割が注目されている。このような背景のなかで作業療法士（Occupational Therapist; 以下 OT）の支援の発展が問われており、2010 年以降は海外の小児領域の作業療法研究も、環境因子と病態の関係を捉える研究が増え、地域実践のエビデンスも充実しつつある [1-3]。

発達障害がある児（以下発達障害児）の地域での支援を考える時に、従来の医学モデルを中心に発展してきた作業療法の「作業・活動」の概念に縛られていると限界が生じる。そのため生態学モデル [4-6] をベースにした環境との相互作用の視点から見直し、個別性、主観性、多様性を包含した作業・活動を作業療法の手段・目的として位置づける必要性が増している。図 1 は、アメリカ作業療法士協会 [7] が示した作業・活動である。本邦の作業療法では、Social Participation, ADLs, Education, Leisure の 4 つ領域が混同されたなかで、作業療法やリハビリテーションが実施されているため、実際の支援の成果が可視化され難かった。

本稿では、子どもの主体的で自由裁量の余暇活動に着目する。そして、子ども本来の作業・活動への主体的な参加や楽しみを文献から学び、子どもや家族中心の支援を目指す児発などでの作業療法の方途を検討したい。

総説の目的は、発達障害のなかでも知的障害を伴わない自閉症スペクトラム障害（Autism Spectrum Disorder; ASD）がある児（以下 ASD 児）に注目し、余暇活動の特徴についてシステマティックレビューを行う。それらの結果から、彼らの自由裁量の時間に展開する作業・活動、つまり余暇活動を理解し、OT が児発などで展開している作業・活動の選択を考え直す機会とし、児発での作業療法の次なる支援の方途を提示することである。

1. ASD に対する作業療法

DSM-5 における ASD の診断基準 [8] の定義を要約したもの以下に示す。

- 複数の状況で社会的コミュニケーションおよび対人的相互反応における持続的な欠陥
- 行動、興味、または活動の限定された反復的な様式がある
- 症状は発達早期に存在していなければならない
- その症状は、社会的、職業的、または他の重要な領域における現在の機能に臨床的に意味のある障害を引き起こしている
- これらの障害は、知的能力障害（知的発達症）または全般的発達遅延ではうまく説明されない

*Corresponding Author: 辛島千恵子
E-mail: c-karashima@ot-si.aino.ac.jp

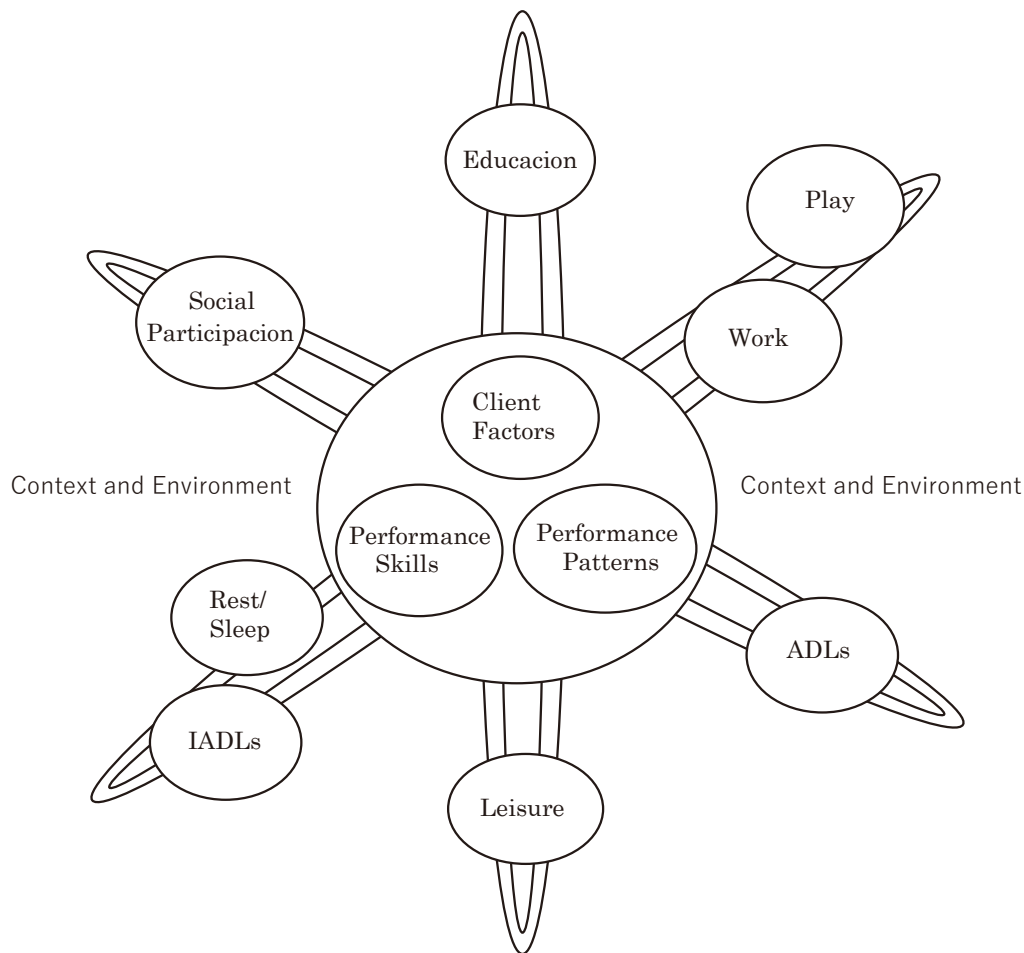


図 1 ADLs : activities of daily living IADLs : instrumental activities of daily living

B の下位項目にあたる「感覚刺激に対する過敏さまたは鈍感さ、または環境の感覚的側面に対する並外れた興味」の症状については、作業療法の領域では、科学的根拠となる感覚統合理論の仮説に基づき展開している [9]。また、それに基づく測定道具も開発されている。現在は、感覚処理機能障害として感覚調整機能障害と行為機能障害の面から評価と治療、支援が展開されている。特に自己の身体と環境からの感覚刺激を組織化し、環境のなかで体を効率良く動かし、行為することを可能にする神経学的プロセスという視点から ASD の作業療法の根拠として世界中の作業療法士の 98% が活用し、57% が推奨している [10]。

2. 余暇活動について

図 1 に示すように、アメリカの OT 協会は Leisure と Social Participation を区別している。内在的、本質的なやる気を起こさせる自由裁量の時間。すなわち、仕事、セルフケア、睡眠などの義務的な活動に従事していない時間に行う非義務的な活動であると定義している [7]。また、Leisure の測定は、興味関心、技能、適切な機会とし、余暇活動への参加は、他の作業・活動と共にバランスを保つことが重要であるとしている。

3. ASD 児の余暇活動と社会性との関連について

知的障害を伴わない ASD 児の作業・活動への参加については、人や環境からの強制を好まないという特徴があり、ASD 児らは好きな活動に没頭するが故に、知識や技能を身に付けて集団のなかでも一目置かれる存在となることも多い。逆に義務的でフォーマルな場面では、そのような行為が集団への不適応を招くことも多いため教育者は関わり方への配慮やクラスづくりに配慮をしている。しかし、自由裁量の時間では堂々と興味関心のある活動に主体的に参加できるチャンスがあるため、社会性の発達にどのような影響を及ぼすのか興味深い。Kelly ら [11] は、ASD 児における余暇活動への参加を促すためのプログラムはまだ確立されておらず今後、作業療法領域での調査・研究に注目する必要があるとしている。一方、幼児期定型発達 (Typically Developing; TD) 児については余暇活動の 1 領域である習い事が社会的スキルの発達と関連しているとの報告があり [12]、余暇活動は、子どもの社会生活能力と自己決定に影響し、社会的スキルおよびパーソナリティの発達に重要である [13]。

方法

システマティックレビュー

1. 文献検索

文献は、PubMed にてオンラインジャーナルを検索した。アメリカ OT 協会の作業・活動の分類に則り Leisure, ASD のキーワードに限定し、意味を異にする Participation, Out-of-school participation, Assessment of participation, Physical disabilities は除外した。対象文献の発表年度は、2008 年～2018 年の 10 年間とした。

2. 文献選定プロセス

図 2 の A～D にそって選定した。A, Leisure, ASD のキーワードを入力して抽出された全文献の要旨を確認し、重複文献を除外した。A, B により選定したフルテキストを熟

読。C により、適格性を確認。D にて適切な最終文献を確認した。

結果

1. 適切な文献

図 2 に示す。A, 検索した全ての文献は 349 であった。全ての要旨を確認し、重複文献 18 を除外した。B, 本研究では、Leisure, ASD の 2 つの内容を包含した文献に絞り込んだ。従来 Leisure と混同して扱われていた Participation, play に含まれる文献 (Video game・7, Social-communication and Play・8, Sport program・1, Physical activity・5, Dancing・1, Social cognitive・1, Group swimming・1, Intervention・4) 計 28 のフルテキストを熟読した結果、本研究の Leisure, ASD の内容が網羅されておらず、除外した。

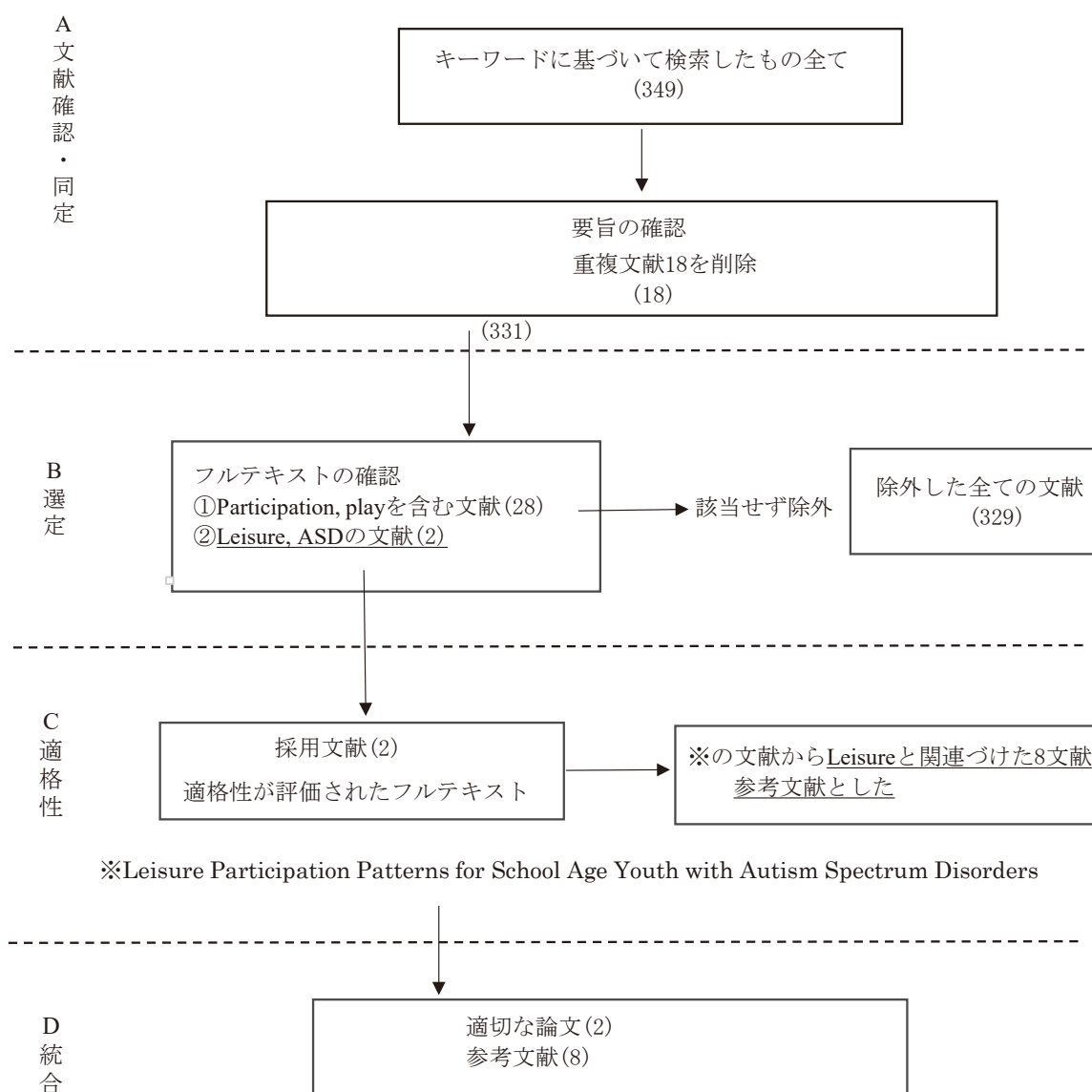


図 2 () 内はヒットした文献数を表示

表 1 2008 年～ 2018 年までの適切な文献と参考文献の一覧

	No.・年代	著者	表題	概要	文献
参考文献	① 2008	Hilton, CL, et al.	Out-of-school participation patterns in children with high functioning autism spectrum disorders.	6～12 歳の ASD 児は社会活動、身体活動、自己啓発活動への参加が少ない。レクリエーションとスキル活動は同等の参加、これらは単独でも可能であり、親により調整が可能である。	[15]
	② 2008	Lee, L, et al.	Children with autism: Quality of life and parental concerns.	定型発達と ASD 青年の比較による調査、地域貢献活動において ASD グループの参加が低い。	[16]
	③ 2010	Hochhauser, M, et al.	Sensory processing abilities and their relation to participation in leisure activities among children with HFASD	ASD 児は余暇活動の多様性と介入効果が低い。	[17]
	④ 2010	Solish, A, et al.	Participation of children with and without disabilities in social, recreational, and leisure activities.	5 才から 17 才の知的障害児と ASD 児は定型発達児に比べて、レクリエーション活動と社会参加が少なかった。しかし、余暇活動に参加している回数は同等であった。	[18]
	⑤ 2011	Reynolds, S, et al.	A pilot study examining activity participation, sensory responsiveness, and competence in children with high functioning autism spectrum disorder.	ASD 青年は定型発達の青年に比べて、クリーニングの仕事、ペットを洗う、ベビーシッター介護などへの参加や自己啓発的が低い。	[19]
	⑥ 2013	Potvin, MC, et al.	Recreation participation of children with high functioning autism.	7～13 歳の高機能 ASD 児と TD 児の比較で身体活動が低いがレクリエーションには差がない。	[20]
	⑦ 2014	Must, A, et al.	Comparison of sedentary behaviors between children with autism spectrum disorder and typically developing children. Autism.	ASD 児が TD 児に比べて、座ったままの活動が多かった。TD 児は週末に身体活動や友達と一緒に工作活動などへの参加が多いが、ASD 児は家で独りの余暇活動が主である。	[21]
	⑧ 2016	Taheri, A, et al.	Examining the social participation of children and adolescents with intellectual disabilities and autism spectrum disorder in relation to peers.	知的障害 + ASD 児が定型発達児に比べて、地域活動、授業、チームスポーツ、特別な行事、社会的外出非構造的遊び、特別なスキルをつけるレッスンや社会活動への参加が少ない。	[22]
適切な文献	⑨ 2018	Karen, R, et al.	Leisure Participation Patterns for School Age Youth with Autism Spectrum	6 歳から 17 歳の ASD 児（知的障害を除外）は定型発達児に比べて、レクリエーション活動以外の全ての余暇活動への参加が少なかった。年長になるに従い、余暇活動にも社会的役割が負荷されることが参加制約へと繋がる。	[14]
	⑩ 2016	Megan, E, et al.	Leisure Activity Enjoyment of Children with Autism Spectrum Disorders	ASD 児は社会性が低いほど、フォーマルな余暇活動、身体活動、社会的活動を楽しめていない。年長（10.5 歳から 13 歳）児は全てのインフォーマルなレクリエーション活動、自己啓発活動を楽しめていない。しかし、スイミングは定型発達児に比べて楽しめていた。	[23]

採用文献は 2 文献であった。C、2 文献を熟読し、適格性を確認した。そのうち Leisure Participation Patterns for School Age Youth with Autism Spectrum Disorders[14]の著者が Leisure と ASD を関連付けて考察している 8 文献の紹介があり、それらを本研究において参考文献とした（表 1）。

2. 適切な 2 文献の概要

2-1 Leisure Participation Patterns for School Age Youth with Autism Spectrum Disorders (表 1 No. ⑨)

2-1-1 目的

ASD 児と TD 児の余暇活動（Recreational Activities, Social Activities, Skill Activities, Physical Activities, Jobs/Chores）の参加についての調査。

2-1-2 対象

The National Survey of Children's Health からリクルート。包含基準:6～17 歳の ASD 児の養育者 823 名と TD 児（知的障害除外）の養育者 34457 名。

2-1-3 測定道具

① ASD の判定: ① Diagnoses of Asperger's Disorder or

Pervasive Developmental Disorders (PDD). ② K2Q35A as well as “Does this child CURRENTLY have the condition?”

- ② 余暇活動の質問紙：項目カテゴリーは Recreational Activities (7), Social Activities (19), Skill Activities (5), Physical Activities (12), Jobs/Chores (8) で参加の程度を測定する。() は下位項目の数を示す。

2-1-4 結論

Recreational Activities を除く 4 つ領域 (Physical Activities, Social Activities, Skill Activities, Jobs/Chores) で 11 歳から有意に ASD 群の参加が低い結果となった。

有意差が認められなかった Recreational Activities では、13 歳まで TD 群と類似しているがそれ以降は TD 群の参加が高くなっている傾向がある (有意差はない)。これらの所見から ASD 群は 13 歳以降になるに従い、Recreational Activities であっても、社会的スキルが要求されることが多くなると参加に制約をきたすようになる。Skill Activities の下位項目に含まれる主体的に生きるためのキャリア形成プログラム等への参加が有意に低かったことは興味深い。参加しやすいレクリエーション活動の要素を取り入れた活動を幼児期から取り入れて、長期的なサポートを継続することが重要である。

2-2 Leisure Activity Enjoyment of Children with Autism Spectrum Disorders (表 1 No. ⑩)

2-2-1 目的

ASD 児 TD 児の活動・参加の楽しみのパターンを検討する。

2-2-2 対象

6 歳から 13 歳 ASD : 67 名 TD : 64 名の子ども本人、または養育者。知的障害は除外した。

2-2-3 測定道具

- ① 社会・コミュニケーション障害の程度の測定：Social Responsiveness Scale, 2nd Edition (SRS-2) questionnaires (Constantino and Gruber 2012), 養育者回答

- ② 余暇活動と楽しみの質問紙：Children’s Assessment of Participation and Enjoyment

(CAPE)。回答に苦慮すると想定される 6 ～ 7 歳児には養育者が回答。項目カテゴリーは、Informal, Formal, Social activities, Physical activities, Recreational activities, Skill-based activities, Self-improvement activities で、質問は「参加の頻度：参加する、しない」「どこで」「誰と一緒に?」「どのように各活動を楽しむか?」などの測定。

2-2-4 結論

ASD 児は、TD 児に比べて Formal Activities において有意に楽しめていなかった。Physical Activities は楽しめているが TD 児に比べると有意に低い結果となった。しかし Social Activities (友達宅を訪問、ショッピング、電話で話す、家族や親戚との付き合い、地域奉仕活動等)、Recreational Activities (コンピュータゲーム、テレビ、趣味を楽しむ等)

で両群とも楽しめており、Skill-based activity, Self-improvement activity は両群とも楽しめていなかった。楽しめていた活動は両群共にトップは、Playing computer or video games であった。また、ASD 児は社会性の障害が重いほど Formal, Physical activities, Social activities の領域で楽しめていなかった。特に 10.6 歳から 13 歳の小学高学年から中学生の ASD 児は、Overall, Informal, Recreational Activities, Self-improvement Activities のカテゴリーで楽しめていなかった。しかし、ASD 児は TD 児と比べてスイミングを楽しんでいた。以下、上記 2 文献の測定道具の質問紙による内容は英文の項目名を使用して述べる。

文献レビューの考察

システマティックレビューでは、アメリカ OT 協会の Leisure の定義に則り、2 文献が選定された。厳密な定義に基づく余暇活動に特化した研究論文は少ない結果となったが、ASD 児の余暇活動の特徴が TD 児との比較から明らかになった。文献⑨は、余暇活動への参加の程度。⑩は、どの程度楽しんで参加しているか? という視点である。以下 2 文献から考察をおこない、続いて児発などでの作業療法の方途について述べる。

1. 何に参加して 何を楽しんでいるか? 楽しむための工夫

文献⑨、⑩と共通して Recreational Activities に TD 児と同程度参加して、楽しめている結果となった。両文献とも測定道具は異なるものの、Recreational Activities の下位項目のコンピュータゲーム、テレビゲーム、ビデオ鑑賞が上位であり、続いてボードゲーム遊び、カード遊び、年長児では映画に行く、ペットと遊ぶなど一人でできることや長時間座ってできる活動に TD 児と同じく参加頻度が多く楽しめていることが分かった。

注意を要することは、このような Recreational Activities で両群が好んで参加している時期から分かれ道がある。それは、ASD 児は 11 歳～17 歳において、その他の余暇活動への参加が激減し、好きな Recreational Activities のみで時間を費やすことが顕著になる。そのため、ASD 児に対しては学童早期から他の余暇活動も楽しめるような緩やかな関与の必要性が示唆された。そして、好きなレクリエーション活動であるコンピュータゲームやテレビゲームに没頭する傾向を社会性の弱化や閉じこもりに直結させて否定的に評価するのではなく、これらの余暇活動を小学高学年から仲間と楽しめる支援が重要である。オンラインなどで自宅から仲間と集い、その面白さを語れるようなグループ活動を設定し、徐々に主体を本人に委ねるなどの段階づけも大切である。例えば、King ら [24] は「楽しむ」ということは「参加」への潜在的要因であると述べている。児発

などや学校などのフォーマルな場の活動から解放された自由裁量の時間に、楽しめる活動がTD児と同じくレクリエーション活動であることは着目に値する。彼らの生活に上手くレクリエーション活動を導入することで、対人・コミュニケーションや身体活動への参加を促す作業・活動を提案する意義は大きい。また、競い合う要素が含まれる身体活動（野球、縄跳びなど）はTD児が6位であるのに対して、ASD児は24位と下位であった。これは、ASD児特有の行為機能の不都合さ [25] が関係していると考えられる。そのため、幼児期から学童期において身体活動への参加に向けて行為機能へのアプローチと技能レベルの適応力を調整することがOTの役割でもある。

2. 参加が少ないのは何？ 楽しめていない活動は？ 各年齢に特徴的か？

文献⑨では、Physical Activities への参加が少なく有意差がある時期は、11歳～17歳である。しかし、文献⑩でも対象が6歳から13歳で、TD児に比べて有意に低く、参加は年長になるほど減り、小学低学年からから楽しめないという結果であった。また、Formal Activities, Skill-based Activities, Self-improvement Activities も同様に楽しめていなかった。これらの結果は明らかに前述したASD児の行為機能障害が背景に [25] にみられる運動企画や巧緻動作などのスキルが必要で「苦手」→「できない」→「失敗するかもしれない、きっと失敗する」→「不安」→「自己効力感の喪失」という負の連鎖に入りこみ、楽しめず参加が減る。これらの否定的側面については、幼児期から小学高学年までの地域での支援が重要であり詳細は後述する。文献⑨で明らかになったことは、参加が少ない Physical Activities, Social Activities, Skill-based Activities, Jobs/Chores は、各活動に少しの違いはあるが高学年になるに従い、さらに参加が減る。そして、15歳以降は全ての活動で参加が有意に減るという結果となった。この時期は、親や支援者の関与が難しくなる思春期である。自己選択や自己決定の意思は、人の発達には欠かせない精神的成長でもある。また、支援者が「先生」的視点から正しいことを指導しても「できない」「好まない」場合は敬遠する。そのため、私たちは同じく思春期を経験した者として、共感者の立場からの手助けや活動への誘いをすることが大切である。これは、ASD児のみでなく全ての成長期にある子どもが望んでいることである。

3. 社会・コミュニケーション障害の重症度と活動について

文献⑩では、社会性・コミュニケーションの障害が顕著なほど Formal, Physical Activities, Social Activities を楽しめていなかったことが分かった。Social Activities においては社会・コミュニケーションスキルがベースになるため、知的障害の重症度との関係は明白である。また、Physical

Activities においても、そのベースである行為機能は知的障害が顕著なほどその障害も重いことは先行研究からも明らかである [26, 27]。しかし、知的障害がある場合は早期から児発などで療育が開始される。そのため、感覚・運動遊びや集団遊びを日常的に取り入れており、これらの経験が彼らの自由裁量の余暇活動の選択にも反映し、本来は楽しめない Physical Activities, Social Activities も自らが楽しめる遊びに変換できることが期待される。その担い手がOTでもある。

余暇活動の特徴と児発などでの作業療法の方途

1990年後半～2000年にかけて、諸外国で家族中心主義的作業療法 [28]、生態学モデルの視点での論文が散見される頃より、著者は「発達障害がある子どもと家族のためのADL」 [29] という視点でいくつか総説を発表してきた [30, 31]。これらと本システマティックレビューを統合させて、今後の児発などでの作業療法の方途を示す。

1. システマティックレビューからの示唆

ASD児が好きで、参加頻度も高いのは Recreational Activities であり、その他の余暇活動に比べて高学年になってもTD児に比べて参加頻度は減るものの楽しんで参加していた。その他の余暇活動、特に Formal, Physical Activities は、11歳という思春期を迎える頃より参加しなくなることから、彼らの余暇活動への参加と楽しみの「偏り」が特徴づけられていく。しかし、余暇活動とは元来、自由裁量の時間に行う活動であるから、これらの偏りのある自己選択も許容されるべきである。むしろ、危惧されることは、大人が自由裁量の時間の偏りに注目し過ぎて、その時間に何かを強要するようなプログラムを提供することである。彼らは、学校、児発など、その他の社会的活動というフォーマルな活動への参加が余儀なくされている。そのため重要なことは、その偏りが生じる思春期からの関与ではなく、幼児期から学童期までにTD児と変わらず楽しく参加している Recreational Activities（コンピュータゲームを活用したコミュニケーション、趣味を生かした交流、自己表現など）Social Activities（小グループでの遊び、園外でのお買い物遊びなど）を通じてその活動内容の楽しみ方に工夫する。Formal な場面の一部を Informal な場面に変換して通常学級のクラス運営、授業作り、クラブ活動に取り入れるようにOTなどの専門家の関与が必要である。2つ目は、6歳前の養育者や療育者などの大人の関与が許される時期で Formal と Informal な場面を提供している保育園等や児発の地域連携に携わるOTなどの専門家から、Recreational Activities, Social Activities の要素を取り入れた集団プログラムの提案が重要である。

2. 児発等での作業療法の方途

Roseam[1]らは幼児期ASD児を取り巻く感覚要因は多様であり、場所、状況、人の関わり方が影響して変化する。そして、ASD児は混乱しながらその多様で複雑な感覚刺激に対して対応しながら生活していると述べている。児発などでのOTの関わりは多くは、一対一で作業療法を提供することと、集団保育（療育）に参加するなかでASD児の感覚調整機能を評価したうえで作業・活動を変化、工夫して感覚環境の調整をおこなっている。同時にHeather[2]らは養育者への作業療法の説明とゴールをその都度共有することで効果的な作業療法に繋がると述べている。つまり、養育者とOTがサポートできる幼児時期から前述した余暇活動の特徴を互いが理解し、目標を確認し合った協働をベースにした作業・活動の選択が重要である。そして、その作業・活動を個別や集団療育に取り入れて「できるかもしれない」⇒「お友達や先生に助けてもらったらできる」⇒「きつとできる」という正の循環を促すことを忘れてはいけな。そして、作業・活動の遂行及び行為そのものを促すことが児童期、自発におけるOTの最も大きな役割である。

まとめ

ASD児の余暇活動のシステマティックレビューをおこなった。最も楽しんで参加していたのはRecreational Activitiesであった。また、Social Activitiesへの参加は定型発達児に比べて低いが楽しめていた。Physical Activitiesへの参加は定型発達児に比べて少ないが楽しめていた。Jobs/Chores, Skill Activities, Social Activitiesは11歳から定型発達児と比べて参加が減少した。今後、彼らが選択した好きな余暇活動に参加することを応援しながら、フォーマルな場である地域の保育園等や学校への訪問活動を中核に据えた作業療法の実践が重要である。OTはフォーマルな場の環境を評価し、インフォーマルな状況設定を試みながらレクリエーション活動等の要素を取り入れた作業・活動を手段や目的にした作業療法の実践が重要である。そして、彼らの「できる」から自己有能感を高める正の循環を促すための科学的根拠をもった専門職であることを忘れてはいけな。

文献

- [1] Roseann C, Ellen S, Janice B, Rachel D, Amy M, Zoe M (2015) Linking Sensory Factors to Participation: Establishing Intervention Goals with Parents for Children with Autism Spectrum Disorder. *Am J Occup Ther* 69(5): 1–8
- [2] Heather M, Stephanie M, Audrey N, Emily P (2015) Effectiveness of Interventions for Children with Autism Spectrum Disorder and Their Parents: A Systematic Review of Family Outcomes. *Am J Occup Ther* 69(5): 1–14
- [3] Sandra H, David N, Lonnie Z, David M (2013) Parent's and professionals' perception of family-centered care for children with autism spectrum disorder across service sectors. *Soc Sci Med* 96: 138–146
- [4] 二木淑子 (2016) 標準作業療法学 作業療法概論. 医学書院, pp. 47–62
- [5] 本田藍, 辛島千恵子 (2017) 特別支援教育における「通常の学級」の環境因子観察チェックリストの開発に関する研究. *作業療法* 36(1): 16–25
- [6] Dunn W, Brown C, McGuigan A (1994) The ecology of human performance, A framework for considering the effect of context. *Am J Occup Ther* 48(7): 595–607
- [7] The American Journal of Occupational Therapy Association (2014) Occupational Therapy Practice Framework: Domain and Process (3rd Edition). *Am J Occup Ther* 68(Supplement1): 1–48
- [8] 日本精神神経学会, 日本語版用語監修, 高橋三郎, 大野裕 (監修) (2014) DSN-5 精神疾患の診断・統計マニュアル. 医学書院, pp. 49–50
- [9] Ayres AJ, Tickle LS (1980) Hyper-responsivity to touch and vestibular stimuli as a predictor of positive response to sensory integration procedures by autistic children. *Am J Occup Ther* 34(6): 375–381
- [10] Sandra TH, Joyce ME (2018) Sensory-Based Approaches in Intervention for Children With Autism Spectrum Disorder: Influences on Occupational Therapists' Recommendations and Perceived Benefits. *Am J Occup Ther* 72(3): 1–8
- [11] Kelly T, Brittany N, Gjyn O, Alison E (2015) Effectiveness of Interventions to Improve Social Participation, Play, Leisure, and Restricted and Repetitive Behaviors in People With Autism Spectrum Disorder: A Systematic Review. *Am J Occup Ther* 69(5): 1–12
- [12] 細川陸也, 桂敏樹, 志澤美保 (2016) 就学前のスポーツ活動・文化芸術活動と社会的スキルの発達との関連. *小児保健研究* 75(1): 54–62
- [13] 子どもの権利委員会 (2013) 休息、余暇、遊び、レクリエーション活動、文化的な生活および芸術に対する子どもの権利 (第31条). 子供の権利委員会, 一般的意見 17号
- [14] Karen R, Ickpyo H, Claudia H (2018) Leisure Participation Patterns for School Age Youth with Autism Spectrum Disorders: Findings from the 2016 National Survey of Children's Health. *J Autism Dev Disord* 48(11): 3783–3793
- [15] Hilton CL, Crouch MC, Israel H (2008) Out-of-school participation patterns in children with high functioning autism spectrum disorders. *Am J Occup Ther* 62(5): 554–563
- [16] Lee L, Harrington RA, Louie BB, Newschaffer CJ (2008)

- Children with autism: Quality of life and parental concerns. *J Autism Dev Disord* 38(6): 1147–1160
- [17] Hochhauser M, Engel-Yager B (2010) Sensory processing abilities and their relation to participation in leisure activities among children with high-functioning autism spectrum disorder (HFASD). *RASD* 4: 746–754
- [18] Solish A, Perry A, Minnes P (2010) Participation of children with and without disabilities in social, recreational, and leisure activities. *J Appl Res Intellect Disabil* 23: 226–236
- [19] Reynolds S, Bendixen RM, Lawrence T, Lane SJ (2011) A pilot study examining activity participation, sensory responsiveness, and competence in children with high functioning autism spectrum disorder. *J Autism Dev Disord* 41(11): 1496–1506
- [20] Potvin MC, Snider L, Prelock P, Kehayia E, Dauphinee SW (2013) Recreation participation of children with high functioning autism. *J Autism Dev Disord* 43(2): 445–457
- [21] Must A, Phillips SM, Curtin C, Anderson SE, Maslin M, Lividini K, Bandini LG (2014) Comparison of sedentary behaviors between children with autism spectrum disorder and typically developing children. *Autism* 18(4): 376–384
- [22] Taheri A, Perry A, Minnes P (2016) Examining the social participation of children and adolescents with intellectual disabilities and autism spectrum disorder in relation to peers. *J Intellect Disabil Res* 60(5): 435–443
- [23] Megan E, Diane M, Amol K, Lisa C, Jill P, Rita K, Jessica R, Nicole P, Claudia L (2016) Leisure Activity Enjoyment of Children with Autism Spectrum Disorders. *J Autism Dev Disord* 46(1): 10–20
- [24] King G, Law M, King S, Hurley P, Rosenbaum P, Hanna S, Kertoy M, Young N (2004) Children's assessment of participation and enjoyment and preferences for activities of children (CAPE/PAC) manual. San Antonio, TX: Psychological Corp
- [25] Miller M, Chukoskie L, Zinni M, Townsend J, Trauner D (2014) Dyspraxia, motor function and visual-motor integration in autism. *Behav Brain Res* 1(269): 95–102
- [26] Dziuk M, Gidley L, Apostu A, Mahone E, Denckla M, Mostofsky S (2007) Dyspraxia in autism: association with motor, social, and communicative deficits. *Dev Med Child Neurol* 49 (10): 734–739
- [27] Hartman E, Houwen S, Scherder E, Visscher C (2010) On the relationship between motor performance and executive functioning in children with intellectual disabilities. *J Intellect Disabil Res* 54(5): 468–477
- [28] Kim B, Anita B, Jacqueline R, Stewart E (2016) Family-Centered Management of Sensory Challenges of Children With Autism: Single-Case Experimental Design. *Am J Occup Ther* 70(5): 1–8
- [29] 辛島千恵子 (2008) 発達障害がある子どもと家族のためのADL. 三輪書店, pp. 1–43
- [30] 辛島千恵子 (2001) 親と子の発達とホームプログラム. 作業療法ジャーナル 35(5): 382–388
- [31] 辛島千恵子 (2010) 共生の源—子供の心に重なる意味と作業療法の可能性. 作業療法ジャーナル 44(3): 180–185

Finding the characteristics of leisure activities related to children with ASD and practices of occupational therapy carried out in child development support centers

Chieko Karashima

Department of Occupational Therapy, Faculty of Rehabilitation, Biwako Professional University of Rehabilitation

Abstract

While much is expected of the role of child development support centers along with other facilities as the core of community support for children with ASD, more interventions by occupational therapists are being evaluated. Purpose: to find ways to practice OT in child development support centers, understanding the activities performed by children with ASD during their leisure time by systemic review focused on the characteristics of leisure activities related to children with ASD. Method: Articles indexed in the PubMed with the terms (ASD and leisure) were searched. Results: Two articles were identified. And eight were identified as part of bibliographies. Among children with ASD, recreational activities were most enjoyable. Social activities were enjoyable as well although their participation was less compared to children with neurotypical development. Conclusion: It is important for occupational therapists to support children with ASD to participate in leisure activities of their choice. It is also important to adopt the elements of their favorite recreational and leisure activities, arranging a part of formal life in daycare and school settings into an informal one. It is expected of occupational therapists as well as educators to take the lead in supporting children with ASD through creating virtuous circles such as enhancing their sense of self-efficacy.

Keywords: ASD (autism spectrum disorder), leisure activities, OT (occupational therapy), community support
